

七年乙亥、大伴坂上郎女、尼理願の死去るこ
とを悲嘆びて作る歌一首 并せて短歌

四六〇番

たくづのの 新羅の国ゆ 人言を 良しと聞かして 問ひ
放くる 親族兄弟 なき国に 渡り来まして 大君の 敷
きます国に うちひさす 都しみみに 里家は さはにあ
れども いかさまに 思ひけめかも つれもなき 佐保の
山辺に 泣く子なす 慕ひ来まして しきたへの 家をも
造り あらたまの 年の緒長く 住まひつつ いまししも
のを 生ける者 死ぬといふことに 免れぬ ものにし
あれば 頼めりし 人のことごと 草枕 旅なる間に 佐保
川を 朝川渡り 春日野を そがひに見つつ あしひきの
山辺をさして 夕闇と 隠りましぬれ 言はむすべ せむ
ずべ知らに たもとほり ただひとりして 白たへの
衣袖干さず 嘆きつつ 我が泣く涙 有間山 雲居たな
びき 雨に降りきや

反歌

四六一番

留めえぬ 命にしあれば しきたへの 家ゆは出でて
雲隠りにき